



NPO法人
府中かんきょう市民の会会報
2025年秋号10月8日(水)発行
通巻99号
発行人 浅田多津子
編集人 葛西 利武
(府中市市民活動センタープラッツ登録団体)

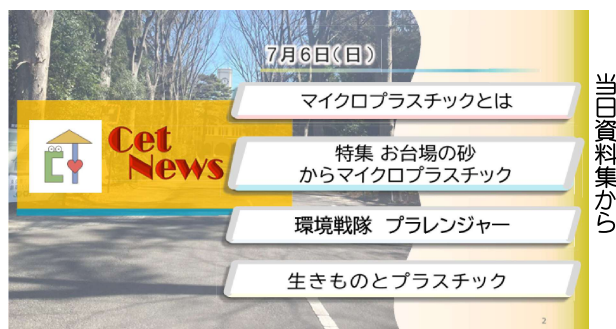


H P

自然環境体験学習 第1回講座 生き物とマイクロプラスチック

タマミ
宮崎珠実

私の名前は宮崎珠実です。東京農工大学環境資源科学科3年で、Cet(※)の代表を務めております。7月6日(日)13:30~15:30に中央文化センターで「生き物とマイクロプラスチック」と題し、海洋プラスチック汚染やマイクロプラスチックについてのワークショップを「つくろう! 学ぼう! 自然・環境体験」の第1回講座として実施させていただきました。※Cet (Community Encourage Team) 東京農工大学 公認自主ゼミ



当日資料集から

プラスチック問題は喫緊の地球的課題

マイクロプラスチックについては、近年ニュースなどで名を耳にすることが多くなったと思います。東京農工大学でも研究がされており、私の所属する学科ではプラスチックや人工有機化合物に由来する汚染についてを学ぶ授業があります。私たち学生が普段授業で学ぶような内容を広めていきたいという思いから、今回のワークショップを作っています。

ワークショップは大きく分けて3部構成にしており、第1部ではお台場から採ってきた砂を用いてマイクロプラスチック採取体験を行いました。砂浜で拾えるマイクロプラスチックは2種類に分けることができます。既成のプラスチック製品が細片化することで生成する「フラグメント」と、輸送・製造過程で環境中に流出したプラスチックの原料「レジンペレット」の2つです。

レジンペレットは名前の通り円盤状のペレットの形を取っていて、肉眼で簡単に見分けることができます。海に行くことがあればぜひ探してみてください。

プラレンジャーに変身/マイクロプラスチックはどこからくる? タイヤ、スポンジ、服からも発生

採取体験でマイクロプラスチックがどういったものなのかを紹介した後は、環境中に出ていってしまったマイクロプラスチックが生活のどこから発生しているのかを考えるアクティビティを実施しました。参加者の皆様にはマイクロプラスチックを発生させるモンスターを探す「プラレンジャー」に変身してもらい、日常生活に潜むマイクロプラスチックの発生源をワークシートで探してもらいました(右上にプラレンジャーの写真)。

車のタイヤや、お皿を洗うスポンジ、洗濯機で洗う服からもマイクロプラスチックは発生しています。日本で生活し

ていればマイクロプラスチックと無関係なんて決して言えないくらい私たちの身の回りにはプラスチック製品がたくさんあります。



参加者に環境戦隊「プラレンジャー」に変身していただき、マイクロプラスチックの発生源を探してもらおう

参加の小学生たちに考えてもらう

ワークショップの最後には、これからのプラスチックとの付き合い方を参加者の小学生中心に考えてもらいました。自分が学校の校長先生、コンビニの社長、市長だったら、プラスチック問題についてどんな行動を起こせるかを想像し発表し合いました。

プラスチック汚染の条約案についての協議が今年8月にスイスで再開され、プラスチックの取り扱いは今後大きく変わっていくことが予測されます。今回のワークショップが、そんなプラスチック問題について今後も興味を持っていただける機会になりましたら嬉しいです。



講座の様子

「自然環境体験学習」年4講座を開催

府中かんきょう市民の会は、府中市受託事業として「つくろう! 学ぼう! 自然環境体験学習」を、今年、4講座開催します。7月6日の第1回講座は、農工大サークルCetさんの企画・進行により「生き物とマイクロプラスチック」を実施しました。

同講座には、12組24名(小学生+保護者)の市民、Cet10名、当会11名、市職員3名の計48名が参加しました。講座後のアンケートでは、参加者全員から「環境保全への関心理解が高まった」との高い評価を得ました。

今後、「昆虫・植物観察-9月」「里芋・大根収穫体験-10月」「クリスマスリース作り-12月」の3講座を予定しています。

第14回市民協働推進シンポジウム／豊かな「水」環境を守るためにできること ～サントリーの『水育』・ 府中の環境教育活動から学ぼう～

浅田多津子

2025年6月1日(日)14:00～16:10

プラッツ バルトホールにて

主催 府中市市民活動センター・プラッツ
府中市環境政策課・協働共創推進課
水環境の未来を一緒に創ろう！



第14回市民協働推進シンポジウムのチラシ

豊かな「水」環境を守るためにできること。サントリーの『水育』・府中の環境教育活動から学ぼう！2部構成で開催された。

第2部のパネルディスカッションに当会理事長・浅田が登壇した。一般参加と関係団体含め来場者約150名。会場入口前のホワイエでは、市内「環境」に関する団体がパネルや活動資料等を展示した。

<開催目的>

☆6月は世界と府中の環境月間！

多摩川と共に生きる府中市。私たちの暮らしと「水」は深くつながっている。府中をはじめ全国の子ども達へ『水育』を展開するサントリーや地域で活躍する「環境教育」団体方々と水がもたらす恵みや課題について語り合う。未来を担う若い世代の皆さんと府中市や国内の水環境と環境教育活動について学び、私たちにできることを共に考え、行動につなげましょう！

シンポジウムの最初に高野律雄市長より挨拶。2014年10月に市制施行60周年記念式典で「市民協働都市宣言」をし、10年目の市制施行70周年に「府中市市民協働の推進に関する条例」2025年3月23日施行と、より一層市民協働を推進するとした。1933年(昭和8年)に東京競馬場が府中市に開場した背景には「水」が豊富なことがあったことにも触れられた。

第1部基調対談 「水」と共に生き、 未来へつなぐ環境教育

農工大卒の(公社)日本環境教育フォーラム理事長・阿部治氏と(株)サントリーホールディングス・サステナビリティ経営推進本部シニアアドバイザー・山田健氏との対談

「センスオブワンダー」の考え方／阿部氏

環境教育のパイオニアと言われる阿部氏からは、1972年に環境問題について世界で初めての大規模な政府間会合・国際連合人間環境会議、通称「ストックホルム会議」が6月5日から開催されその日を「環境の日」とした。『環境教育』の概念は世界中に広まるが、一方で子ども達の自然体験は減ってきている。神秘さや不思議さに目を見張る感性「センスオブワンダー」の考え方を述べられた。

【この感性はやがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、私たちが自然という力の源泉から遠ざかることやつまらない人工的なものに夢中になることなどに対する変わらぬ解毒剤になるのです】。環境教育の中で取り組む重要性を見直し、地域でもそれらの人材を育てるしくみが必要。持続可能な社会の実現(SDGs)に向けて歩むべしとされた。



阿部治氏と山田健氏



阿部氏



山田氏

「水」への敬意／山田氏

2000年から「天然水の森」活動の企画を進めてきた山田健氏からは、雨水を20年かけて清らかに湧く水の森へと維持するには森を守り生物多様性を進めること。社員教育として森に入り木を植える活動等を進めてきた。昨今新たな事業開発のための社員教育として他社からこれらの依頼が増えている。まずは『水』への敬意を持つこと、安心して飲める水道水にすることは必須。

山田氏によると水の自給率は23%(2019年)と低く、アップに努めることや農地を生きた土に戻すことなどが提案された。事前に「西府町湧水」を訪問され、崖線の湧水復活のためには庭等の土をむき出しにせず、雑草の根を抜かず『刈り伏せ』にする作業を年に3回程繰り返すと雨水を地下に導いてくれる土が育っていくとのこと。

[illegible]

地球温暖化とは？ その原因と状況

小西信生

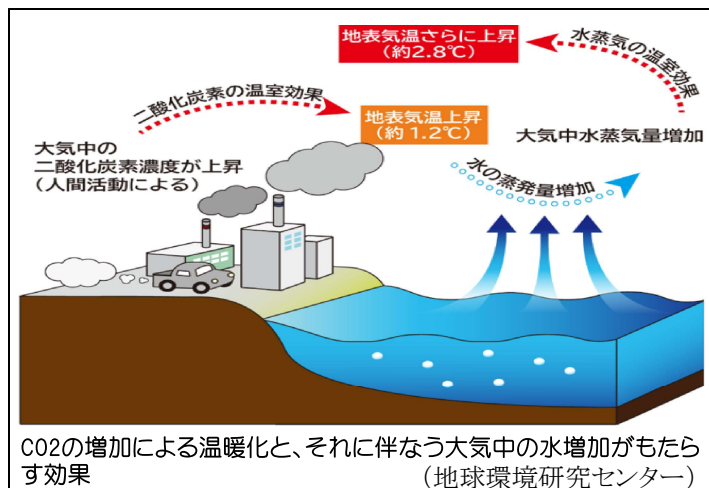
1 地球温暖化とは、どのような現象か？

地球全体の気温が長期間上昇することで、特定の地域での気温の上昇や、1日や四季の寒暖の変化とは別だとされています。

2 温暖化のメカニズムとは？

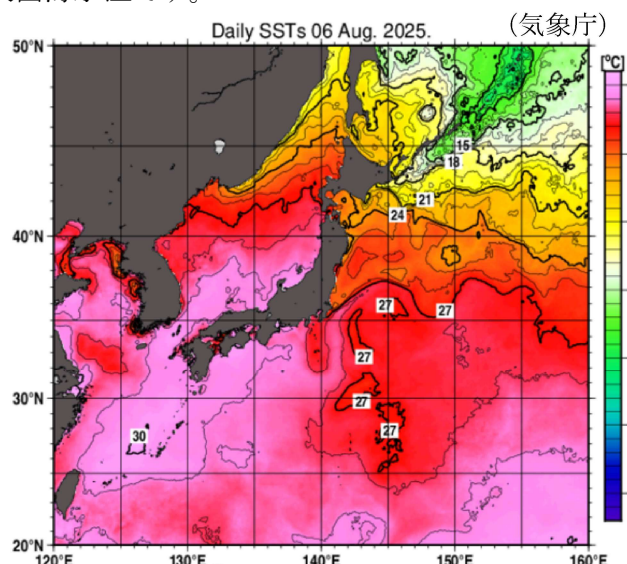
(1)地球温暖化ガスと水蒸気

CO₂増加によって気温上昇が起きるとされていますが、気温上昇の要因の約半分は水蒸気により、CO₂による影響は20%程度とされています。



(2)海水温の変化

気温が一度暖かくなると、海水温も上昇させ、海水の循環で深い水の温度も上昇させ、表面の海水や大気をさらに冷めにくくなる効果があるとされています。下図は府中市の気温が40℃を記録した2025年8月5日の日本近海の表面海水温です。

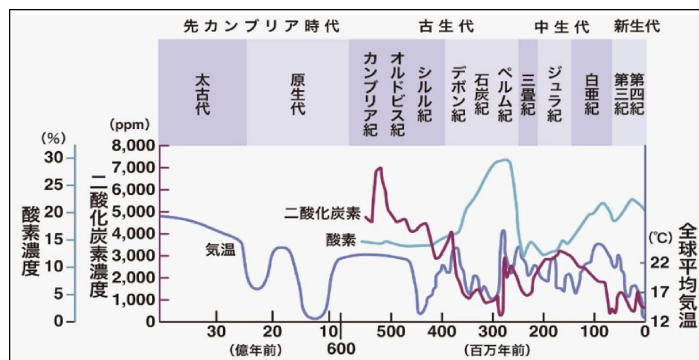


3 本当に地球は温暖化しているのか？

(1)地球の歴史46億年の中での状況（CO₂濃度、酸素濃度、温度変化の状況）

地球の46億年の歴史のなかでは、気温変動は右上図のとおり非常に大きく、CO₂濃度、酸素濃度も大きく変化しています。ただ、現在地球の気温は19世紀後半より1℃以上（2024年で1.36℃）上昇し、直近では10年で0.27℃上昇すると危惧されています。

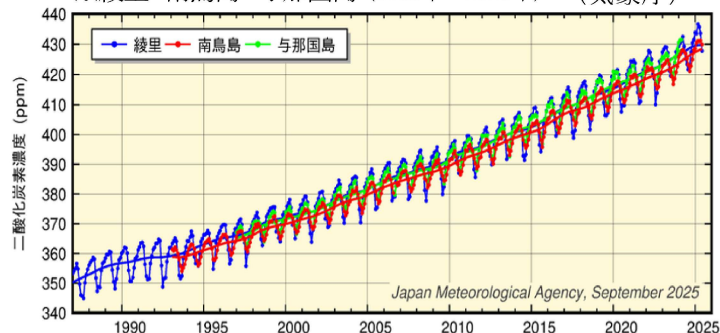
気温・二酸化炭素濃度・酸素濃度の変化



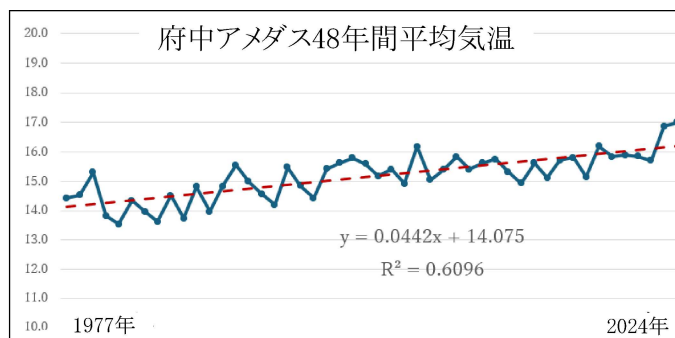
(地球46億年気候大変動43P)

岩手県三陸の綾里や、京都の南鳥島などの直近のCO₂濃度は以下のとおりで、継続して増加しています。

※綾里 南鳥島 与那国島（1985年～2025年）（気象庁）



府中の気温は下図のとおり、48年間で約2.08℃上昇しています。府中の気温上昇は、都市の温暖化による影響もあると考えられています。



気象庁府中アメダスデータ（筆者が図表化し近似曲線を追加）

4 温暖化の影響とは？

(1)気温の上昇（海水温も上昇）

ほぼ毎年、日本の平均気温は過去最高と気象庁は発表しており、異常気象と言える状況で暑さだけでも市民生活に影響がでる状況で、世界全体でも同様の暑さになっています。

(2)氷河減少と海面上昇

気温が上がった結果、ヨーロッパアルプスやアジアのヒマラヤなどの高地の氷河はもとより、北極や南極の氷も減少が報告されています。また、溶けた氷の分海水は増えますし、氷の重さで沈んでいた地盤はその分上昇すると考えられることから、太平洋やインド洋の島国では国土の多くが海面下に沈んでしまうことも懸念されています。

(3)天候の激変（台風など暴風雨の激甚化・回数増、砂漠化の進行など）

気温の上昇は、海水温度の上昇を伴い、台風やハリケーンなどの激甚化・回数増をもたらします。

全くとっていいほど雨が降らなくなった地域も増大しており、アフリカのサハラ砂漠南部のサヘル地域や、オーストラリアの砂漠周辺、北アメリカ中部の草原地帯などでは、砂漠化が進行しています。

(4)農作物への影響

農業に与える影響も大きなものがあります。気温上昇と、豪雨や干ばつなど温暖化に伴う気候の激変により、農業の被る影響は大きなものがあります。降水量の地域によるばらつきも収穫に大きな影響をもたらしており、稲を始め一般の葉物野菜の他、根菜類も収量や品質に大きな影響が出ています。

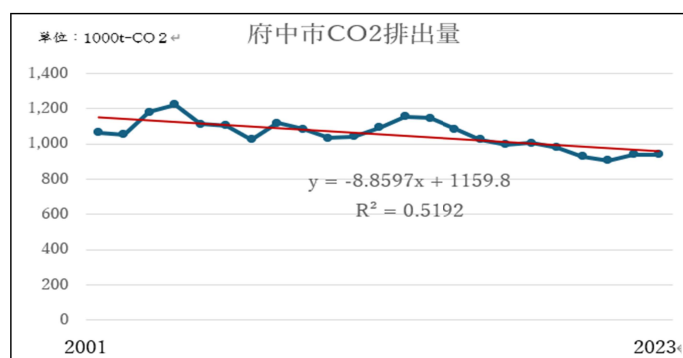
(5)生物多様性の減少

生物多様性は、単に地球温暖化だけではなく、人間の経済・生活による生物の生活領域の変化、外来生物の持ち込みによる生物間の生存競争の激化、もありますが、温暖化が進めば、その地域の植物相は変化し、植物相の変化に伴って、昆虫や魚、鳥、哺乳動物なども変化していきます。

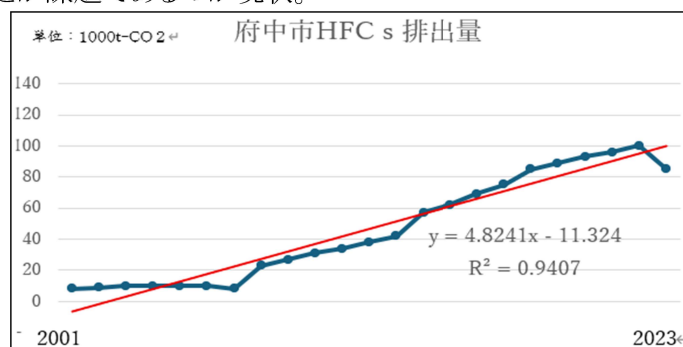
5 地球温暖化ガスの排出状況と対応

(1)実際の排出量の推移

府中市、東京都、日本の地球温暖化ガス排出量は減少していますが、世界全体では減少していません。結果としてCO2濃度は一貫して上昇し、気温上昇も同様に上昇しています。



HFCs(代替フロンガス)の値はCO₂とは逆に増加。エアコンや冷蔵庫からのガス抜けによるものですが、大規模事業所の一部しか捉えられておらず、実数を把握することが課題であるのが現状。



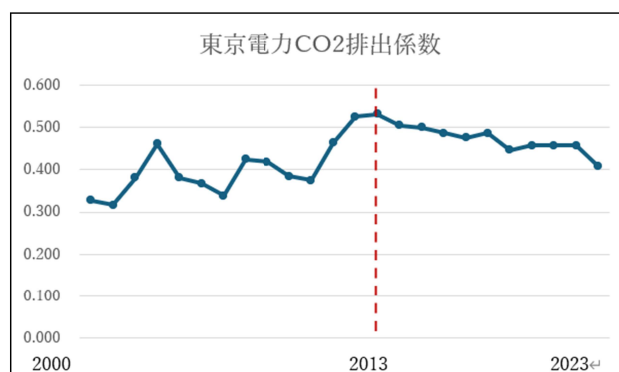
(2)電力CO2排出係数

東京電力のCO₂排出係数は、東日本大震災後の2013年の0.531をピークとして減少傾向にあります。

2011年3月の福島第一原子力発電所の地震・津波による事故と、新潟柏崎刈羽原子力発電所の停止、石炭火力など代替電力のCO₂排出により排出係数はピークとなりました。

その後発電所の原燃料の見直し、太陽光発電などの再エネの発電比率の増加などにより、直近の2023年の係数は0.408と低下傾向にあります。しかし、2030年の目標0.25までには0.408から、38%以上の改善が必要な状況で、

再生可能エネルギーの推進や、省エネでCO₂排出の多い石炭火力発電を減らせたとしても実現困難な状況です。



東京電力ホールディングス
筆者が図表化

6 何が温暖化対応の妨げとなっているか？

(1)生活レベルの維持向上

私たちが生活するとき、家庭では電力を使い、産業としても発電したり、製鉄業のように鉄鉱石とコークス(石炭を蒸し焼きしたもの)で鋼鉄を生産したり、物資や人の輸送にガソリンや軽油を使ったりもしています。

また、発展途上国でCO₂排出量の多い国は地球温暖化問題より、大気汚染と健康被害も大きな問題となっており、CO₂排出量の問題を健康問題としてとらえた方がより優先度の高い課題になりうることも考えられます。

日本は2030年の排出量を、2013年比46%削減として施策と展開していますが、片方で電力料金の補助金制度や、ガソリンの補助金制度で物価上昇を抑え国民の生活を守る施策も展開しており、目標達成は困難な状況。

(2)原子力発電推進の是非

東京電力は福島原発事故などの影響で、原発による発電は0になっています。原発稼働については、日本での地震や津波による放射能事故のリスクは無視できない問題であり、放射能廃棄物の問題も未解決です。

人類の最大の脅威は「核兵器と地球温暖化」との主張もあり、地球温暖化対応で原発稼働を推進させ、核兵器の開発を進めないように、慎重に取り組むべきでしょう。



原発事故直後の福島原子力発電所3号機燃料池(エネルギー庁)

7 国際的な温暖化対応の状況(パリ協定)

(1)地球温暖化ガスの削減目標設定

地球温暖化ガス削減を、具体的に数値目標として対外表明している国は、パリ協定締結国196カ国中で先進国の一部に留まり、多くの発展途上国では排出削減は努力目標に留まっています。

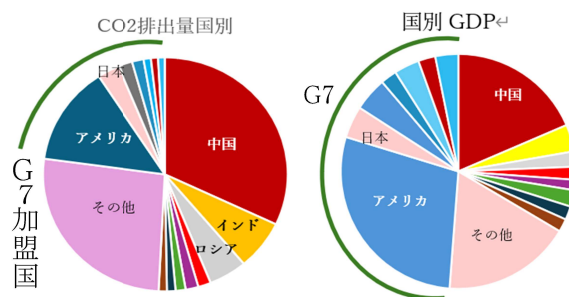
次頁はG7加盟国と、その他の国のCO₂排出量を比較したものです。GDPの比較ではG7加盟国は世界全体の約半分を占めていますが、CO₂排出が少ないサービスのウェイトが大きいこと、工場も省エネ化が進んでいることによると見られます。

地球温暖化ガス削減は、府中を含めた日本国内でも2030年までの46%削減目標達成は困難な状況であり、2050年の温室効果ガスを0にすることも目途はたっていません。

世界的に見ても、CO2の排出状況は同様です。全世界に対して豊かな生活と、省エネの生活モデルを産業も含めて実績とともに成功モデルとして提示し、世界各国に敷衍し浸透していく国があるとすれば、日本が最初になってほしいものです。

8 私たちのできること～できる範囲で、できることから～

そのためにも、私たち一般市民も、身の回りの省エネやリサイクルなど、それぞれができることをできる範囲で実践していくことが重要だといえるでしょう。また、緑地の保全是CO2の回収に有効ですし、緑地とその周辺の気温を穏やかにする効果も知られています。府中市内の公園緑地や緑道・街路樹などの保全も、進めていきたいものです。



※EDMC(エネルギー・経済統計要覧2023年版)
を筆者がG7とそれ以外に編集

前号に引き続き、お二人の新人が寄稿

新入会員のご紹介

社会人を休職、大学院で学びなおし

武田舞子

現在、社会人を休職して、教育系の大学院で学び直しをしています。時間に余裕ができたことで、以前から気になっていた地域の自然にじっくり向き合いたいと思い、入会しました。湧き水や植物、動物など、身近な自然には関心がありましたが、知らないことばかりです。活動を通して、楽しみながら、いろいろなことを学んでいけたらと思っています。

私は石マニア

私はちょっとした石マニアで、宝石のようなきれいな石よりも、河原や道ばたに転がっている石を集めて観察するのが趣味です。「この石はどこから来て、どんなふうにできたんだろう？」と考えつつ、その土地の性質をあれこれ妄想しています。これからは、地域の植物や動物について学びながら、それを育む地質や地形にも目を向けて、生き物と地形や地質の関係についてあれこれ妄想を深めていけたらと思っています。皆さんと、ご一緒できる時間を楽しみにしています。どうぞよろしくお願いいたします！



写真は、河原で拾ったチャート(プランクトンからできた石)と火打ち金で火を起こしているときの一枚です。よく見ると、火花が散っています。

「府中」で生まれ育ちました

野口瑞恵



府中市美好町公園で遊ぶ野口さん。昭和50年(1975)頃

6月に入会しました野口です。府中で生まれ育ち、ここ10年ほど府中を離れていましたが、一昨年戻ってまいりました。現在は、環境系の仕事をしていることもあり、地元府中の環境について、もっと知りたいし、関わりたいと思い、入会いたしました。

現在の仕事は、主に動植物や自然環境全般の報告書作成に係る情報収集やデータ集計をしています。Excel、Word、ArcGIS、Illustrator などほかいろいろを使って、どうにかこうにか報告書納品までこぎつけるよう奮闘しています。

知床でも生活

いまはいろいろリハビリ中で行けていませんが、自然豊かな地を散策するのが好きで、好きが高じて少しの間ですが知床で住んでみたこともあるほどです。

朝起きて窓を開けると、エゾシカと目が合うという生活でした。(エゾシカがいないときは近くにヒグマが…) 身体が重くあまり動けませんが、皆さんの力になれるよう頑張ります。よろしくお願いいたします。



知床でのヒグマの爪あと

ハケ情報

(1)崖地(ハケ)にはキツネノカミソリ(ヒガンバナ科)がよく似合います。そのキツネノカミソリが1ヶ月遅れで開花しました。今年の猛暑と雨不足が原因かもしれません。長い間観察していますが、このようなことは初めてです。

(2)ハケにて第5回「剪定・整枝講習会」を10月25日(土)9:30~11:30に開催。先着10名。詳細は「広報ふちゅう10/1日号」に掲載。



田中香代子(8月17日)撮影

自然観察たんけん隊

魚の部

福田 信二
笠原 太一
中田 丞治

8月2日(土)9:00～11:30。天候晴。西府崖線府中用水と西府文化センターで開催。参加者32名(子ども10名。保護者9名計19名。農工大3名。環境政策課3名。会員7名)

河床環境の多様度が生き物にとって重要

福田信二 東京農工大学農学部
地域生態システム学科教授

今年も「自然観察たんけん隊」に参加させて頂き、心より感謝申し上げます。今回、魚を採集した水路は、堰上げされていたり、橋や樹木で日陰になっていたり、昨年よりも多様な環境が広がっていたように感じています。例えば、水深は堰上げ部の前後で変化しており、樹木付近から下流に進むと少し浅くなり、さらに下流の暗渠部に向けて少しずつ深くなっていました。

深めの場所にはコイやフナが泳ぐ姿を確認できたため、定置網を設置したところ、ニゴイとオイカワを採集できました。ナマズは、樹木付近で採捕しましたが、少し流れが速い区間でしたので、ここに分布していたことは意外でした。おそらく、水路床の堆積物(大礫など)に隠れていたのでしょう。今回の観察を通して、改めて河床環境の多様度が生き物にとって重要であることを実感しました。

また、今回は、サポートしてくれた学生2名の専門性を活かし、水生昆虫の採集にも挑戦しました。石をひっくり返して昆虫を観察することは、私にとっては魚釣りの餌探しのように楽しいのですが、名前を知らない昆虫がほとんどです。名前や生態を調べることで自分自身と自然のつながりが深まるように感じています。この点は、府中かんきょう市民の会会報(2025年夏号)での原田さんの寄稿に共感しています。



「自然観察たんけん隊」のようなイベントは、多摩川や府中用水、西府崖線のつながりを生き物を通して体感できる貴重な機会です。今後ともよろしく願い申し上げます。
④府中用水での魚とり。福田先生は右奥空色シャツ

淡水魚類の分布と環境要因を研究

笠原太一 博士課程2年

「自然観察たんけん隊」にスタッフとして参加し、充実したひとときを過ごさせていただきました。本イベントは、府中用水を対象に、親子で水辺の生物と触れ合う機会を提供するもので、私も参加者の方々と共に、網を片手に水生生物を採捕しました。観察の最中には、大人も子供も夢中になって水中を覗き込み、「捕れた!」「この生き物はなんだろう?」などと賑やかな声が飛び交い、身近な自然との触れ合いを通じて、参加者の表情に笑顔があふれる場面が随所に見受けられました。

府中用水は国立市から府中市を流れる用水路であり、



西府文化センター講堂での観察会
(空色)シャツ福田先生

農業用水の供給に加え、地域環境の保全にも重要な役割を果たしています。本イベントでは、コイ、フナ、ニゴイ、オイカワをはじめとする淡水魚類に加え、複数の水生昆虫が観察されており、営農活動が地域の生物多様性を支えていることを改めて実感しました。子供たちが水辺の生きものと触れ合いながら、農業と自然のつながりを肌で感じられたことは、スタッフとしても大変意義深い経験となりました。

一方、条件付特定外来生物に指定されているアメリカザリガニが採捕される場面もありました。アメリカザリガニは、在来の水生生物の捕食、住み家や餌資源をめぐった競争などにより、生態系に大きな影響を及ぼす可能性があります。ただ、日本へのアメリカザリガニの導入は人間活動によるものであり、責任は生物ではなく、人間にあることを忘れてはいけません。外来種も命ある存在であることを踏まえ、その導入の経緯や地域生態系への影響を正しく理解しようとする姿勢は、外来種と向き合い、自然環境の保全を考えるうえで不可欠です。

現在、私は農業用の水源として開発されている河川を対象に、淡水魚類の分布とその環境要因を研究しています。最終的には、営農活動によって生じる河川流量の変化が魚類の生息環境に与える影響を解明し、持続可能な河川流量の管理手法を提言することを目的としています。本イベントを通じて、地域社会における農業と自然の関係性の奥深さを改めて感じるとともに、自身の研究が持続可能な農業に向けてどのように貢献できるのかを考える貴重な機会となりました。農業と自然が共生する風景を、これからも次世代へとつなげていくために、地域の一員としてできることを一つずつ実践していきたいと思います。

市街地の水生昆虫に驚き!

中田丞治 修士課程1年

私は東京農工大学 水資源計画学研究室 修士1年の中田丞治と申します。この度は、スタッフとして「自然観察たんけん隊(魚の部)」に参加させていただき、誠にありがとうございました。私は、この春から東京農工大学に進学したばかりで、府中市についてはまだ詳しくなく、市内で魚を捕獲する機会もこれまでありませんでした。そのため、府中市内で水生生物と触れ合える貴重な機会をいただき、大変ありがたかったです。また、元気なお子さんたちと交流したり、保護者の方々から生き物に関するお話を伺ったりと、楽しく有意義な時間を過ごすことができました。

当日は、たも網や定置網を用いて複数種の魚を採集しました。私自身もたも網でコイを捕まえました。野生のコイの予想以上の力強さに、網から飛び出して逃げられないか心配になるほどでした。また、逃げられると言いますと、福田教授から定置網で捕獲したナマズを受け取り、水槽に移そうとした際に、ナマズが手をすり抜けて逃げかける場面もあり、思わず肝を冷やしました。日常ではあまり遭遇しないタイプの緊張感でした。



水生昆虫

笠原太一さん
中田丞治さん

私は日頃、水生昆虫を対象に研究を行っていることもあり、魚の採集と併せて府中用水周辺に生息する昆虫の採集も行いました。確認できた昆虫は、コオニヤンマ、ハグロトンボ、ヒラタカゲロウ、トビケラ、ガガンボで、魚や昆虫以外ではカワニナやエビ類の捕獲も確認しました。捕獲はしていませんが、シオカラトンボが周辺を飛行する姿も見られ、東京の市街地にも想像以上に水生昆虫が生息していることに驚きました。

私の研究では、水生昆虫の種の多様性の評価を行っており、今回の府中用水のように都市域のみで構成される生息地において、水生昆虫が他の生息地と行き来しているのか、それとも孤立した個体群となっているのかなど非常に気になるところがありました。今回の経験を通じて、水生昆虫の多様性を明らかにすることで、水生昆虫に限らず多くの野生生物の種の多様性を考慮した都市空間の整備に貢献していきたいという思いを改めて強く持つことができました。

自然観察たんけん隊



昆虫の部



東京農工大学 昆虫研究会

小池尊琉 (コイケ タクル)

日程は7月26日(土)9:00～11:30、天候は晴。参加者一般、農工大、(株)第一造園、当会会員等31名。

昨年度にも参加させていただいた東京農工大学昆虫研究会の小池尊琉です。私は、幼稚園に通っていた時から虫が好きで、小学生の頃は、近所で毎日のように虫採りをしていました。中学生の時は、昆虫からは離れていたのですが、高校生の頃に再度、昆虫が好きになりました。夜間、ライトがついている場所に行き、昆虫の写真を撮ってそれを同定したり、昼間にバッタを採ったりしていました。

大学入学後は、昆虫研究会に入部しました。今回、虫の魅力を伝えることができたらいと思い、西府崖線での自然観察たんけん隊に参加させていただきました。

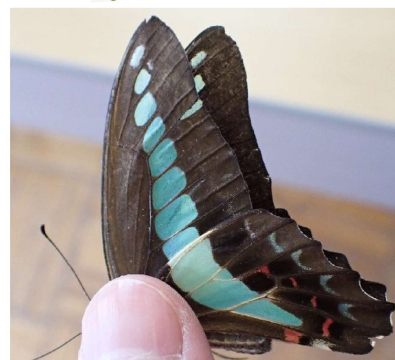
アオスジアゲハの紹介

当日は猛暑で、野外での観察は30分ほどとなりました。観察の途中に水分補給をする時間を設けるなど、熱中症対策が行われました。暑さにより、昆虫もほとんどみられないのではないかと危惧していたのですが、意外にも8類、37種の昆虫を観察できました。

また、④写真のアオスジアゲハを紹介できたことがよかったと思います。翅の青い筋が非常に美しいチョウです。飛んでいる時、動きが速く、私が小学生の頃は網で捕まえる際、非常に苦労したことを覚えています。今回は、2回逃げられましたが、3回目で捕まえることができました。

アオスジアゲハの幼虫は、タブノキやクスノキなどの葉を食べます。観察会を行った場所である西府崖線近辺では、それらの樹木が生えていたため、アオスジアゲハが見られたのだと思います。また、タブノキの葉にアオスジアゲハの幼虫がくっついており、その様子を観察することもできました。

ここで、チョウを採る時のコツを紹介したいと思います。それは、一度網を振って逃げられたとしても諦めないことです。連続でチョウを狙って網を振り続けると、1回振った網で逃げられたとしても、2回目または、3回目で網に入ることがあります。また、動いているチョウの姿をしっかりと目で追って認識することも重要です。網を振る際、狙いが定まります。



アオスジアゲハ

昆虫標本の紹介

西府文化センターの観察会では、スポーツドリンクが配布され、水分補給が行われました。昆虫研究会の部員が作成した昆虫標本を紹介、生体展示も行いました。

写真⑤は、部員が採集した虫たちです。質問を受け付ける時間では、たくさんの質問がありました。部員が質問に答えると、子供たちから質問が、溢れ出すようになってきて、非常に盛り上がりました。また、子供たちの親御さんからも質問がありました。標本に興味を持ち、絵を描いているお子さんもいました。昆虫に興味を持っていたのではないかと思います。

短い時間でしたが、昆虫の魅力について伝える非常によい機会となりました。参加していただいた方にも、昆虫に興味を持つきっかけとなれば嬉しく思います。



生体展示として部員が持ってきた昆虫たち。カブトムシ、コブキ、ガナフ、シロホシハナムグリ等